
Summer

葉月ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Summer

【コード】

N4523C

【作者名】

葉月ちゃん

【あらすじ】

いやあ、私にしてはトンでもなく長くなったので前編と後編に分けました。

前編

今年は珍しく冷夏だった

そんな暗い夏

向日葵だけが明るく咲き誇っている夏

あたし達の学校は市内でも有数の弱小高校で部活も全て1回戦敗退。

アタシの所属する吹奏楽部も東部大会銅賞で終わっていた

彼氏もないあたしは今年も暇になりそうだな〜と思っていた

「だ〜、彼氏欲しい!!!」

「紹介する?」

「合コン? ちょっとイヤだな〜」

「そんな贅沢なこと言いなさんな」

「だってー、自分の彼氏は自分で見つけたいじゃん」

「そりゃ分かるけどさ、現実はそのもいかないよ」

くえー校舎に残っている生徒わあ、速やかに帰りましょうっ

「ウっわキモい声、そんじゃまたね」

「うんじゃあね」

帰り道に繁華街を歩いていると、

「おねーちゃん一人い？ちょっと一緒に遊ばない？」

「いえ、結構です」

「え〜つれないなーちよつとでいいからさあ」

「結構つつてんだよ糞親父〜!!」

グーでパンチ!!

ボカッ

ウンいい音

「やってくるな姉ちゃん、こうなったら意地でも連れてくもんね」

「触るなーこの変態親父〜」

そのとき!!

「やめないか!嫌がつてるんだから」

うっわ〜ドラマか!! でも助かった〜

「なんだよー兄ちゃん邪魔すんなや〜、今良いとこなんだから」

「その子に触るな〜!!」

またしてもグーでパンチ!

ボツカーン!!

親父吹っ飛んでいった

ざまあみる

「大丈夫かい?」

「えっ、ああ大丈夫です、ちなみにあなたは誰ですか?」

「誰でもないよ、一介の高校生さ」

「えっ、じゃあどこの高校ですか？」

「宮桜高校、そんじゃあね」

そう言っすえいといなくなった

「……なんなのあのヒト??」

後日学校にて……

「絶対運命の人だって〜！」

「あんまり運命とかそういうの信じてないから」

「つまんない女だねー、ロミジュリだっすめっちゃめっちゃ運命感じてるでしょ〜」

「なんなの『ロミジュリ』って」

「ロミオとジュリエットの略でしょうが〜、知らなかった？」

初耳だぞ〜

「だいたい宮桜高校ってめっちゃくちゃ遠いじゃん、なんでその人ここまで来たんだろ？」

「家がこの辺とか」

とりあえず宮桜高校に行ってみた

……制服可愛い、いいな〜

うちの学校の制服ダサイからな〜

「あ、このあいだの！本当に来たんだ」

「…だって来ていいって言ったから来たじゃん」

「まあそうなんだけど……」

「一緒に帰っていい？」

「ああ〜、まあ良いけど……」

帰りの電車の中

「家ってどこ？」

「んん〜、えーと緑川公園の近く」

「あ〜、うちんちの近く！今度あの銅像の下で今度会おー!!」

「良いけど……メアド交換する？」

「…」

かくしてメアドを交換した

「そういえば名前聞いてなかったね、なんていうの？」

「秋川誠也、きみは？」

「赤城恵、お互い出席番号1番仲間だね」

「彼氏っている？」

「万年出来そうも無い、誠也は？」

「同じく独り者、周りがカップルだらけだから肩身が狭い」

「へへ、じゃ、また後でねー」

「うんじゃあなー」

帰りながらふと気が付いた

「あたし呼捨てにしてたじゃん！！」

その後、呼捨てにしたことをメールで謝ろっか確認を取ろっか真剣に悩みながら帰った

って言うか、もう言っちゃってなんとも無かったんだから普通に呼び捨てで良いってこ

とだよな

っていつか2回続けて長いと読者飽きるよね、もうすでにかなり長いし〜

今何文字い？ え？もうすぐ1500字い？！ 長くない？ あたしにしては

他の人は知らないけど

じゃ、変なトコだけどいったん終わり

後編をお楽しみに〜

後編（前書き）

随分間を空けてしまいました。待ってた人が居たらごめんなさい。

後編

もうすぐ夏休みも終わり。

つまんないな、まだどこも行ってないのにさ。

秋川誠也ともうまく行ってて2人でどこか行くなんてないけどメールしただけですごく

楽しい。

友達に言わせてみればそれは好きって事らしいけど肝心のあたしは

……

喋ってるだけで楽しい、そんな関係。

t o 誠也

今度どこか行く？

もうすぐ夏休みも終わっちゃうよ。

f r o m 恵

しばらくして返信が来た。

t o 恵

じゃあ今度遊園地行こう！

ちょうどチケットもあるし

じゃあ今度の土曜日に行こうか

待ち合わせ場所は姫桜駅で！

f r o m 誠也

キャ~~~~~!!!!めっちゃ嬉しい!!!!

行く行く!!!

と言いついで、土曜日。

うーんとオシャレして姫桜駅に行った。

そしたらもう誠也が待っていてくれた。

「わく、待たせちゃった？」

「ちょっと」

「ゴメス」

「まあいいよ、電車に乗ろうか」

「うん！」

電車の中であたし達はよく喋った。

お互いの高校の話とか、先生の悪口なんかを。

その時、電車が『ガッタン』と揺れてあたしは誠也に倒れ掛かった。

「あ……ごめん」

「別にいいよ」

誠也は気にする風も無かったけどあたしは耳まで真っ赤だった。

遊園地に着くまであたしは真っ赤で何も喋れなかった。

そんなあたしを見て誠也はクスツと笑って、

「可愛い」

と言った。

そして遊園地に着くまで頭を撫でてくれた。

なんだか小さい子になった様な感じがしたけど、黙ってた。

遊園地に着くとそんな事も忘れてはしゃいで遊びまくった。

ジェットコースターでは誠也が怖がって怖がって乗りたがらなかったがあたしが無理やり

乗せた。

「ぎゃあああああ~~~~~!!!」

悲鳴と共に出発したが登り切る前に気絶したので反応が見れなくて残念だった。

最後はお決まりの観覧車………だけであたし高所恐怖症、誠也にしがみ付いて乗った。

「ジェットコースターはOKだったのに何で観覧車はだめなの？」

「ジェットコースターは速くて下を見る暇が無いけど、観覧車はゆっくりで長いからどうしても

下見ちゃうの~~~~(汗)」

「なんとなく分かる気はするけど……やっぱりジェットコースター駄目だ」

「怖がってる誠也可愛かった」

「電車で真っ赤になってたメグ可愛かった」

2人してクスクス笑った。

もう空は薄暗くなり始めていて何かが起こりそうな予感がした。

「街の明かりつてきれい……………」

「メグの方が綺麗だよ」

「えっ……………」

と言った途端、電気がふつと消え、観覧車は止まってゆらゆらした。

運悪く、あたし達のゴンドラはてっぺんでふらふらしていた。

「きゃ……………、高い！怖い！」

「大丈夫、俺がいるから」

「怖い怖い怖い怖い……………」

泣き始めたとき、ふわりと暖かいモノが覆いかぶさった。

「……………誠也？」

「大好き、メグ大好き」

「誠也好き、あったかい」

「メグは俺が守るから、泣かないで」

涙でぐしょぐしょの顔を上げて頷いた。

「うん……………」

涙で濡れたあたしの唇に誠也が指を滑らせる。

その指を口に入れる。

「しよっぱい」

「涙だもの、しよっぱいよ」

「だね」

今度は誠也の唇があたしの唇と重なる。

もうすっかり暗闇の中、夏の夜空に大輪の花火が咲いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4523c/>

Summer

2010年12月27日22時05分発行